

I はじめに

情報バラエティーは、いまやテレビの顔である。

ある情報や事実をもとに、その意外性や隠された真相、かかわっている人たちの体験や思いを、インタビューやロケ取材等によって準備した映像と、タレント・芸能人らの出演者が繰り広げるトークを交えて、わかりやすく、おもしろく番組化する。これこそテレビが作り出した、テレビならではの、いかにもテレビらしい番組スタイルである。

バラエティーは何でもありだ、と当委員会は言ったことがある（委員会決定第7号「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」2009年11月17日）。もちろん情報バラエティーもバラエティーの一種だから、何をやるのも自由、何でもありである。

ただ、頭に「情報」と冠をかぶせている以上、取り上げようとする情報や事実が確かなものでないと、具合が悪い。正確な情報、公正な事実を前提にするからこそ、出演者が持てる才覚と技芸を駆使してそこから引き出す意外性や驚きに意味が生じ、スタジオトークも生彩を帯び、番組全体のおもしろさへと発展する——情報バラエティーとは、そのような番組だからである。

情報や事実について正確さや公正性を期すことの重要性は、とりわけ「報道」分野について言われてきたことだが、情報バラエティーにとっても同様だろう。視聴者に意外な事実、びっくりするような情報をまさに事実として提示し、それらをめぐってトークが繰り広げられる以上、その事実や情報は正確・公正なものでなければならない。

これは言い換えれば、情報バラエティーの制作者は情報・事実をていねいに扱い、その正確さや公正さに意識的でなければならない、ということである。マスコミの世界にはウラ取り、ダブルチェック、クロスチェックなどという言葉があるが、何もこれは報道のためにだけあるのではない。本人の言い分だけでなく、それを裏付ける証拠や書類、第三者の見方や証言等によって、正確な情報、公正な事実を磨き上げておくことは、情報バラエティーにとっても欠かせない手順である。

考えてもみてほしい。あとになって、あの情報は間違いでした、などとなったら、出演者が一生懸命繰り広げたトークや演技は何だったのか、ということになる。視聴者は、時間を返せ、と言いたくなるだろう。テレビがせっかく作り上げてきた情報バラエティーという番組スタイル自体が、台無しになってしまう。

委員会はここ数ヵ月間、情報バラエティーの3つの事案（同一番組の2事案を含む）を審議してきた。事案の概略と問題点は別項に記すとおりだが、各事案に共通するの

は、制作の各段階で、上で述べたような情報の正確さ、事実の公正性に対する、またそれを確認することの重要性に対する認識が極端に不足していたことだった。

その背景には、情報バラエティー制作の仕組みや組織にかかわる構造的な問題が横たわっている可能性があるだろうし、いまのテレビを取り巻く情報環境に影響された問題もひそんでいるかもしれない。委員会は個別の事案に共通して現われた、現代的な情報の特質とその扱い方の難しさについても検討した。

こうした問題に敏感でなければならないのは、情報バラエティーを企画し、制作進行を采配する制作幹部たちである。彼らがそもそもこの現代において、情報がどう生産され、どのように流通しているかについて冷静な認識を持っていなければ、番組で取り上げる情報・事実の扱い方もぞんざいになるだろう。

委員会はまた、情報バラエティー制作の最初の段階にいる制作者のことも意識した。多くは若いスタッフだろうが、彼らこそ現場に行き、関係者から直接話を聞き、じかにモノや資料を見、その上で撮影もして、もっとも最初に、もっともナマの形で情報・事実に触れている。彼らが正確さや公正さに意識的であることが、危ういところの少なくない現代の情報環境の落とし穴に落ちないための最初の備えとなる。だったら、若い制作者たちに届くような意見書にするべきではないか……。

というわけで、この意見書には、各事案の検証部分とは別に、「若きテレビ制作者への手紙」をつけることにした。そのなかで私たちは、情報バラエティーを作っている若い人たちに寄せる期待を語っている。どうかこの意見書と一体のものとして、お読みいただきたいと思う。